

(7) 透析患者では感染症死亡率が高い：一般住民との比較 (図表7)

論文の概要

2008年と2009年の統計調査（集計表）を用いて、透析患者の感染症死亡率を一般住民と比較した報告である。

タイトル：High mortality rate of infectious diseases in dialysis patients：A comparison with the general population in Japan

著者：Wakasugi M, Kawamura K, Yamamoto S, Kazama JJ, Narita I

掲載：Therapeutic Apheresis and Dialysis 2012；16（3）：226-231

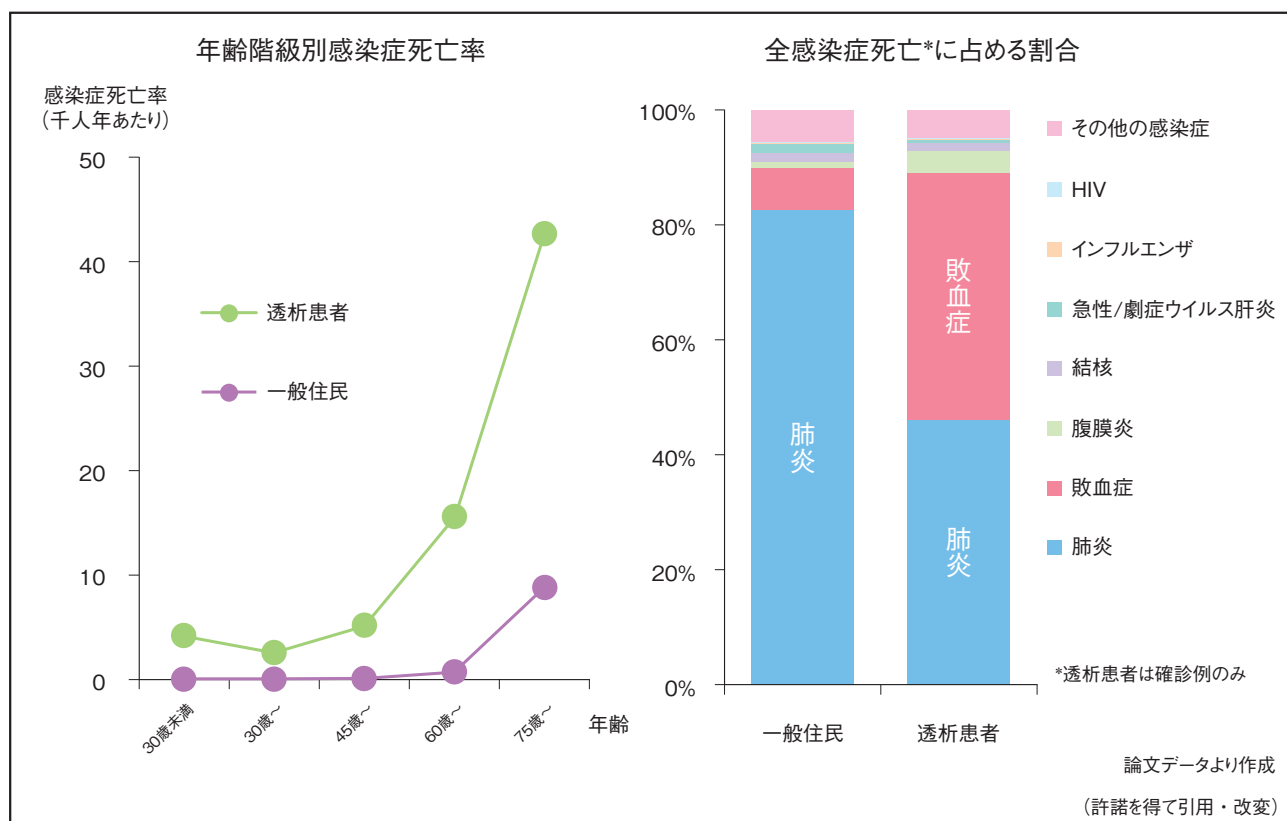
対象：日本国民

要因：透析患者

対照：一般住民

アウトカム：感染症死亡率

結果：年齢調整を行った透析患者の感染症死亡率は、一般住民の7.5倍（95%信頼区間7.3-7.6）と、わが国においても高いことが明らかになった。確診例のみを用いた疾患別の検討では、肺炎が感染症死亡の8割を占める一般住民とは異なり、透析患者では肺炎と敗血症が2大原因であった。



解説

透析患者の敗血症死亡率は一般住民の100~300倍（Kidney Int 2000；58：1758-64）、肺感染症死亡率は約15倍（Chest 2001；120：1883-7）との報告が米国からなされていたが、内シャントの割合が高く、ダイアライザーの再利用もないわが国での現状は不明であった。

会員ホームページからアクセスできる統計調査の集計表と、人口動態統計調査を用いて、感染症死亡率を一般住民と比較したところ、透析患者の標準化感染症死亡率比（SMR）は、7.5（95%信頼区間7.3-7.6）と高く、確診例のみを用いた疾患別の検討では、敗血症14.3倍（13.5-15.0）、腹膜炎9.9倍（8.2-11.8）、インフルエンザ3.1倍（1.6-5.5）、結核2.0倍（1.5-2.7）、肺炎1.3倍（1.2-1.4）の順でSMRが高かった。一般住民との感染症死亡率差の7割を敗血症が占めており、一般住民との差を縮めるためには、敗血症対策が重要であることが示唆された。

なお、感染症疾患別の検討では、透析患者は確診例のみのため、疾患別死亡率は低めに見積もられている。そのため、一般住民との差は、これらの数字よりも、もっと大きいと思われる。